

石川 広報

元 - 2号

発行 令和元年 12月 5日 (木)
発行人 石川地区小学校長会長 芳賀 徹
編集者 石川地区小学校長会 広報部会

巻頭言

想定内？想定外？

石川地区小学校長会副会長 草野 正夫
(浅川町立浅川小学校長)

「台風19号の時、祖父と祖母の家の床が水びたしになった。自分の家は大丈夫だったので、片付けの手伝いに行った。祖父と祖母の家は、広いし畳の多い家だったので片付けが思った以上に大変だった。けれど、自分よりも大変な思いをしていると思うと、やる気が出た。他にも、近くの人や知り合いなどの人も手伝ってくれ、もうすぐ終わると思っていたが、まる一日使っても家は片付けられなかった。だから、片付けが終わるまで、がんばろうと思った。」

(4年生の短作文より)

今回の台風19号は、福島県に大きな爪痕を残した。石川地方の被害も甚大で、床上浸水となった校長の自宅も複数あった。今回の台風の被害を、想定していた校長はどれほどいたであろうか。水害に対する意識は、かなり低かったのではないだろうか。浅川町は、電話もメールも使用不可となり、機種によっては繋がらない携帯電話もあった。子どもの安否確認ができなかった。町に問い合わせをして、被害の状況を確認することができた程度であった。ハザードマップの範囲は・・・学校が避難所になった際の対応は・・・被害に遭った子どもの心のケアは・・・様々な課題が浮かび上がった今回の水害であった。浅川町のハザードマップは、30年に1度の大雨で社川が氾濫して浸水することを想定して作成されていた。今回の被害とほぼ一致している。

水害で思い出すのが、水難続きだった初任校のことである。着任の1年前に、4年生の男子が、久慈川で水死した。川での魚捕りが大好きな腕白少年であったそうだ。

魚を追ってテトラポットの中に入り、動けなくなったと聞いている。私が、担任するはずの子どもであった。一周忌には、クラス全員でお墓参りをした。子どもたちの頬に伝わる涙が忘れられない。1年目の冬の月曜の朝、階段から滝のように水が流れていた。凍結した2階の水道の蛇口を上向きそのままにしたために、休日に溶けて噴水状態になったのだ。細かいパーツの木製の床は、ほとんどがめくれ上がっていた。慣れないかなで板を削り、ボンドを片手にパズルのピースをはめ込むような職員作業が続いた。2年目の夏、バイクに乗って、自宅から午後のプール指導に向かった時のことだった。パトカーや救急車が、プールの脇に止まっていた。プールの排水口に4年生の男子の足が挟まり、おぼれたのである。幸い、教員が蘇生をし、重大な事故にはならなかった。3年目の秋の朝、学校の校庭が泥流でどろどろになっていた。大雨で、裏山の沢が流木でせき止められ、泥水が校庭に流れ込んだのである。保護者や教職員の作業が続き、なんとか校庭の使用ができるようになった。

災害や学校の事故は、避けては通れない。しかし、想定内か想定外かでは、大きく対応の仕方も被害の大きさも違うだろう。初任地の水難は、どうだったのであるだろうか。

想定外？の震災で、原発事故に苦しめられ9年が経過しようとしている。しかし、今回の水害で、身近な危機への意識が薄かったことを反省したい。災害や事故を予見し、被害を最小限に食い止めるのが、校長の役割なのだから。

人づくり

玉川村立須釜小学校長 塩田 明美

豊かな自然に囲まれた須釜小学校に赴任して8か月。4月、玄関に入る前の30m程の花壇には、背丈のそろった1000株以上の赤いチューリップが、毎朝迎えてくれている。

5・6年生による球根掘り、堆肥入れと土作り、全校生による定植作業。全家庭の協力による夏休みの花壇の水やりと草むしり、色とりどりの花々が最高の姿で咲き競う秋の花壇等、後になってこの長く美しい花壇は、全校児童、教職員、保護者の方々が力を合わせて作られていたことを知り、赤いチューリップがますます美しく感じられた。と同時に、花を育てる優しい心を持った子どもたちの心をますます磨いていかなければ…という思いを新たにしました。

今年、石川郡に戻ってきて、ふと、学級担任時代のことを思い出した。うまくいかないことばかりだったが「子どもに自分の考えをはっきり言えるように表現力を育てたい（自信を持たせたい）」、「一人一人が大事にされる学級を作りたい」という理想を胸に、授業づくりや学級づくりに夢中だったこと。今立場は変わっても、思いは変わらない…。

共に勤務する事務職員、用務員さん、支援員さんはじめ全ての教職員は、それぞれの立場で子どもたちに関わり、それぞれの思いを持って子どもの成長に寄与している。担任には見えにくい子どもの素顔や思いを理解し、豊かな関わりを持ち指導してくれていることもある。本校の伝統である花壇づくりのように、教職員全員の熱意と能力を結集させ、真の「人づくり」に当たっていききたい。管理職という立場にあっても、あの頃の思いを持ち続けながら。

新任の校長として

平田村立小平小学校長 双里 義和

約30年ほど前、初任者としていわき市の学校に着任した私には、当時のいわき教育事務所の所長さんから、いつも言われていた言葉がありました。「プロの世界へ入ったのですから、初任者とはいえ、4番バッターです。期待しています。」という言葉です。平成5年度は、読売巨人軍に松井秀喜選手が入団し、高校卒業とはいえ大活躍をしている時でした。この言葉をかけていただくたびに、身の引き締まる思いをしていました。

当時いただいたその言葉は、新任の校長の私にとって、再度戒めとなって迫ってきています。経験豊富な校長先生と責任の重さや使命は変わるところはなく、今まで以上に多くの責任が自分にかかってくる。

しかしながら、新任の校長である私に、校長としての重責を遂行していく上での知識や経験が十分にあるはずもなく、校長として改めて研究と修養の必要性を痛感しているところです。

さて、久しぶりに故郷である石川地区に勤務することができました。これまで、子どもたちの笑顔に癒やされ、先生方の頑張りに感心し、本地区の先輩の校長先生方の温かいご教示に感謝する毎日です。

小平小学校の校歌に「理想も高く 力の限り 学びの道をひとすじに」という一節があります。校長室に掲げられている歌詞を目にするたびに、校長として精一杯努力し、この校歌に恥じないように、職務を全うしたいと考えております。これからも、ご指導よろしく願いいたします。



雑感

石川町立沢田小学校長 我妻 浩之

歳を取ったなあ、と思う。

全校集会の写真。自分の立ち姿。驚いた。まっすぐ立っていたつもりが、どうも勾配がよくない。しゃきっとしていない。両膝がぐにゃっと前に突き出ている。これが、全体に年寄り感を出している。体力が低下したり、頭上が寂しくなったりしていることは「はい」。でも、これは受け入れがたい。人前に立つときは、膝に願いを込めねば！

かつて、受話器を握ることが多い立場にあった頃のこと。高位・高齢の方からの電話。その方は、私が名乗り出した瞬間に用件を話し出してきた。こちらの話には聞く耳を持たない。「その先は分かっているので聞かなくてよい」「無駄を省き、さっさと用件を済ませる」ということだったのだろう。その度、気分は湿った。

そして今。歳を取った私は、度々反省する。家族や同僚と話をしている時。相手の話を概ね理解した瞬間に、その先の内容が読めた瞬間に、相手の話を断ち切り、もう口が動き出している。今、相手は不愉快だろうなと思いつつも口は動いている。かつてのあの方と同じ。相手を湿らせている。

どうして話を最後まできちんと聞けないのか。どうして我先に自分の考えを押し出すのか、押し通そうとするのか。

「相手への敬意が足りない」ことがその原因だ。歳を取って偉くなったと思いがかり、相手を敬う気持ちが薄れているのだ。

両膝が突き出て、ふにゃっとした歳取りは許されても、同僚や弱い立場の方への不遜な歳取りは許されない。周囲を湿らせ、いやな思いをさせないように、慎みを深めなくてはならない、と最近痛感している。

学校の強み

玉川村立玉川第一小学校長 渡邊 良一

朝の交通指導を終え校庭に行くと、マラソンや鉄棒、鬼ごっこやリレーを楽しんでいる子が目に入る。朝の短い時間を惜しむように動き回っている。その中に花壇の世話をしている子どもたちがいる。用務員さんの傍らで一緒に作業をしている。この時期の作業は今まで私たちの目を楽しませてくれていた草花の後片付けになる。時間を割り当てての活動もあるが、細かい片付けが残ってしまう。それを自主的にやっている。本校の緑化活動は4月に始まり、ほぼ1年間続く。ピーク時には、早朝から花壇周りは様々な作業を自主的に行う子どもたちでいっぱいになる。子どもたちの意識が違う。「やるのはあたりまえ」と思っている。この意欲は緑化活動から他の活動にも伝播している。子どもの動きがいい。これは本校の伝統であり、強みでもある。

学校にはそれぞれ特長としての強みがあると思う。私の初任地は「体力づくり」の文部省研究指定校だった。走力一つをとっても3年間で驚くほどアップした。次の学校は道徳教育を継続して研究していた。家庭と連携して子どもたちの道徳性を高める取り組みはPTAとの強い協力体制により大きな成果を見た。また、緑の少年団活動に焦点をあてて教育活動を推進し「学校林活動と言えど〇〇小」で通じる学校にいたこともあった。それぞれの学校の特長、強みは、その時々々の児童と教職員が時間をかけて築き上げてきた貴重なものだと思う。

今、本校は青少年赤十字の考え方を教育活動にいかし、子どもの効果的な成長に繋げる研究を進めている。「気づき 考え 実行する」という子どもたちの姿が、新たな本校の強みとなることを願いながら。

「言葉にできない」

平田村立蓬田小学校長 目黒 慎治

還暦。正直まだまだ先のことだと考えていた。しかし、今まさに60歳。「光陰矢のごとし」を実感している。

歳をとって月日の経つのが速く感じるのは、チョコちゃんによると「トキメキがなくなったから」だそうだが、今の私には当てはまらないように思う。この1年（まだ8ヶ月だが）は、トキメキを含め人生で初めての経験をした。ひとつは台風19号による床上浸水である。家電や畳、自動車2台などはなんとか避難させたが、それでも多くのものを失った。しかし、失ったもの以上の「善意」をいただいた。自宅はほぼ復旧したが、周囲にはまだ道半ばの方々も多いことを考えると、感謝の言葉しかない。

一方トキメキでは、今年の夏、最後に担任した子どもたちが久しぶりに同級会で集まり、招待された。そのとき、子どもたちが（とは言っても、もう40歳近くになるが）、還暦のお祝いをしてくれた。突然のことで、まさに「サプライズ」であった。また学校では、学習発表会の全校合唱の練習終了後、これまた突然全校生に「Happy Birthday to You」を歌ってもらった。まさしく還暦の誕生日であった。しかもその日の退勤時刻、職員室から歌声が聞こえてきたので顔を出すと、小田和正の「言葉にできない」の歌で、先生方にも誕生日を祝っていただいた。歌詞どおり、こうした子どもたちと先生方みんなに「あなたに会えてほんとうによかった」と感じたが、感謝の気持ちをうまく「言葉にできな」かった。

残りわずか4か月ほど。どのようにしてみんなに感謝の気持ちを伝えたいのか思い浮かばない。できることといえば、みんなの幸せを祈ることぐらいだろうか。

朝の日課

古殿町立古殿小学校長 舘 初浩

教頭昇任とともに、学校を朝7時に開ける生活が始まった。学校は変わっても家を出る時間を調整し、この生活は続いた。寝坊するのが心配で、休業中も生活のリズムを変えずにいたことを思い出す。校長初任地でも、路線バスが7時に学校に着くので、この生活は続いた。ただ、朝の時間の過ごし方が変わった。児童の登校がほぼ完了するまでは、その様子を見ることにした。小さな学校だったので、路線バスを迎えると、徒歩通学班の集合場所まで迎えに歩いた。それでも、時間が余るので、児童と一緒に校庭を走ったり、鉄棒を指導したりした。

古殿小に赴任し今、スクールバスの運行等に変更があればバス停に、通常は2つの方向から徒歩通学する児童を日替わりで迎えに行く。学校を7時に出て、出会った最終班の最後尾を歩き学校に着くと、ほぼバスの着く時刻となる。こうして出張等なければ、ほぼ毎日登校する児童に「おはよう」と声を掛ける。昨日休んだ子、早退した子、担任が気に掛けている児童など、今日の様子を確認する。気になったことは、その都度関係教職員に伝える。こんな毎日を送っているが、ふと気づくと自分が思う以上に自分の姿が、地域の方の目に留まっている事に驚く。登校する児童を見送る保護者や祖父母、バスの運転手さんからの情報、時には、わざわざ待っていて教えてくださる方もいる。また、初対面でも感謝の言葉をいただいたり、なによりも親しく話しかけていただけ。それ以上に、素敵な姿を知る事になった。毎朝、登校途中、道路脇の観音様に、「今日も一日、みんなが交通事故に遭いませぬようにお願いします。」と祈る一児童がいることに気づけたことだ。